

「もっとウキを知りたい～基本を覚えて使い分けよう～ウキ戦術～」

今回はチョウチンウドンセット釣りがテーマとなる。この釣法は浅ダナウドンセット、段差の底釣りとともに、厳寒期の定番のひとつだ。また、昨今のトーナメントでは、この釣法で上位になる人が多くなっている。

そのように強いこの釣りに向いたウキとは、どのようなものなのか？

適した形状、素材構成などを紹介し、さらに「オモリに関すること」についても解説する。

チョウチンウドンセット用ウキのバリエーション

「尽心作」ではこれまで、チョウチンウドンセット釣りに焦点を絞ったウキがなかった。そのため、この釣りに適した専用ウキを製作することにした。

それが「Type-C4」（チョウチンウドンセット用）である。その設計する過程をお知らせすることで、どのような考えで各パーツが組み立てられているのか、ボディー形状が決定されているのかを明らかにしていきたい。

ただし、私個人の方法ということを前置きしたい。

プロトタイプの実釣

製作するためにベースにしたのは深ダナオールマイティ用の「Type-F」で、このウキはテーパー付きの細パイプトップが付いている。まず、トップをストレートの細パイプに改良した「Type-F改」をつくり、感触を確かめるためにこのウキを使って釣りをしてみた。

Type-F改の仕様

- ボディー：羽根2枚合わせ
- 足：竹（元径2・0mm→ゴム管差し込み部分1・0mm）
- トップ：ストレートの細パイプ（元径1・4mm、7～11目盛り）
- 羽根径：修正時5・8mm



Type-F改

ベースとした「Type-F」（深ダナオールマイティ用）をストレートの細パイプにしたもの

●Type-F改の構成（単位：mm）

番号	ポテイの長さ	足の長さ	トップの長さ	全長	標準オモリ 負荷量
5	50	55	80	185	0.7g
6	60	55	90	205	0.9g
7	70	55	100	225	1.05g
8	80	55	110	245	1.25g

改良タイプの製作

実際に釣りをしたら修正点が見つかり、いくつかの部分を次のように改良した。

- ①もう少しトップの長さが欲しいと感じ、少し長さを伸ばし、かつ体積がほぼ同じになるようにストレートの極細パイプトップに変更。
さらに、トップの長さとのバランスをとるために、足の長さを 55 mm から 70 mm に変更

②竹足では 70 mm に長くすると強度に不安があるため、素材をカーボンに変更
③トップと足が長くなることから、ウキのセンターが出しやすい 2 枚合わせを採用

④サオの使用は 8 ~ 10 尺を想定し、サイズは 6、7 番を基準とする。2 つもオモリ負荷量は 6 番（ボディー 60 mm、5・8 mm 径）が約 0・9 g、7 番（ボディー 70 mm、5・8 mm 径）で 1・05 g。

サイズダウン、アップ用として 5 番（ボディー 50 mm、5・8 mm 径）、8 番（ボディー 80 mm、5・8 mm 径）をラインアップ。

⑤ボディー形状はくさび型を基本としながら、肩でのウケをあまり出したくないのでややなで肩にした

そうしてでき上がったのが、○ページの「Type-C4」の試作品。トップの塗りは、前回紹介したように、1 ~ 3 目盛りは徐々に塗り幅を広げ、4 ~ 9 目盛りは同じ塗り幅とした。

Type-C4 の仕様

●ボディー：羽根 2 枚合わせ

●足：カーボン（元径 1・0 mm → ゴム管手前 0・8 mm → ゴム管差し込み部分 1・0 mm）

●トップ：ストレート極細パイプ（元径 1・2 mm、7 ~ 11 目盛り）

●羽根径：修正時：5・8 mm

今後も実釣を重ね、足の長さやトップの長さ、しぼり加減等、最適値を見つけ出していきたい。



Type-C4

ストレートの極細パイプトップでカーボン足

● Type-C4 の構成 (単位 : mm)

番号	ボティーの長さ	足の長さ	トップの長さ	全長
5	50	70	90	210
6	60	70	100	230
7	70	70	110	250
8	80	70	120	270

オモリ負荷量の表示

私の製作する「尽心作・匠」では、ウキのオモリ負荷量を表示している。これを目安にすると、ヘラブナがハシャいでウキがなじみにくい場合、同タイプでオモリ負荷量の大きいもの、あるいは異なるタイプのウキに、容易に交換することができる。



筆者が製作するウキのすべてには、ボディーの下の方にオモリ負荷量を表示してある

標準オモリ負荷量

以前より、ウキを紛失しても同じ号数であれば、エサ落ち目盛りは一緒という要求に応えたいと考え続けていた。しかしながら、素材にかなりのバラツキがあるクジャクの羽根やカヤという天然素材を使いながら、どのように実現するのか苦慮していた。

○ページの写真にあるように、真鍮管やガラス管を使って羽根・カヤを押し込み、ホットプレートやアルコールランプで加熱して径を揃えることにより、この問題の解決を試みている。

つまり、同じ径の羽根・カヤを事前に揃え、成形器を使うことにより、常に均一したウキをつくる。

フリーハンドで円を描くことは難しいが、コンパスを使って円を描くことは、子供でもできる。

ヘラウキづくりも同じで、様々な道具をより、工程をやさしくして、精度の向上を図ることができる。

そのためにも、写真にあるようなボディー成形のための成形器は、私にとってはとても重要である。



真鍮管の中にクジャクの羽根を入れて、径を修正しているところ



「泉舟工房」の成形器各種（泉舟工房のホームページアドレス＝
<http://uki-sensyu.com/>

「スイッチシンカー」との組み合わせ

ウキのおもり負荷量がある程度わかっている程度であれば、マルキューの「スイッチシンカー」と調整用おもりの組み合わせで、エサ落ち目盛りを楽に決めることができる。

「スイッチシンカー」は0・25g、0・5g、0・8g、1・0g（タンク

ステン)、1・2 g、1・6 g、2・0 gがあり、交換が簡単・迅速にできるので便利。

そして、オモリ負荷量がある程度わかっているならば、使う「スイッチシンカー」の大きさは事前に決まる。具体的には表を目安としている。

ただし、ウキにはミチイトの重さが加わることから、ミチイトの号数や長さが変わればエサ落ち目盛りも変わる。そのときは同じ調整用オモリをそのまま使うことはできないが、だいたいのオモリ量がわかっているためオモリの調整は簡単だ。

ウキのオモリ負荷量に適した「スイッチシンカー」の大きさ

ウキに表示されているオモリ負荷量	使用するスイッチシンカー
0.75 g以上1.00 g未満	板オモリのみ、もしくは0.25 g + 調整用板オモリ
1.00 g以上1.50 g未満	0.5 g + 調整用板オモリ
1.50 g以上2.00 g未満	0.8 g + 調整用板オモリ
2.00 g以上3.00 g未満	1.0 g + 調整用板オモリ
3.00 g以上	1.6 g + 調整用板オモリ

今回は、春間近ということで、浅場で底釣りをされる方が多いのではないかと思います。表面張力を利用した底立てフロートの紹介とその製作方法について解説していきたい。